
鬼退治士

しん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼退治士

【Nコード】

N2030Y

【作者名】

しん

【あらすじ】

役所で公務員として働いていると思っていた父は、実は国が秘密裏に組織している悪霊や鬼を退治する専門家鬼退治士だった。そんな父が突然の死を迎えた。そしてそこに一度もあったことがない父の姉が現れた。父の最後の言葉、そして鬼退治士の血を引く者として、水月は姉が暮らす北海道は函館にある鬼退治士を養成するための高校に通うことになる。という感じの話です。

黒スーツと父さん

もう四月になるというのに、日陰にはまだ雪が残っていた。吹き抜ける風は、冷たいというよりも痛かった。

北海道といえど、『寒いところ』。

それは十分承知していたのだけれど、実際にその地に降り立ってみると、想像していた以上に寒く、そしてその質は今までに経験してきた寒さとはまた違ったものだった。

鋭くて、肌をずっと裂くようなそんな冷ややかさがあった。

水月は体をぶるっと震わせ、ジャケットの胸元を合わせた。

つい二時間前までジャケットの袖をまくって歩いていたのが嘘みたいだ。

上着をもう一枚というか、コートが欲しいくらいだ。

「なにしてんだよっ！ さっさとしろ！」

タクシー乗り場の前から鬼叔母が怒鳴った。

「…はい」

自分にしか聞こえない声でやる気のない返事をし、水月は叔母の所へと向かった。

なんだって、こんなことになってしまってるんだろう。本当なら今頃、高校の入学に備えてあれこれ楽しく過ごしていたっていうのに。

この鬼叔母が一緒だと考えると、水月はこれから先の人生に憂いを感じずにはいられなかった。

高校を卒業するまでの間。最低でも三年間は鬼叔母と一緒に過ごさなければならぬのだから。

「ほら、さっさと荷物渡しな。ああ、もう！ そのギター邪魔だよ、邪魔。お前がぎゃあぎゃあわめくから仕方なく許したけど、やっぱり捨ててくるべきだったな。ほらっ！ 早くしなよ！」

…鬼ババア。

水月は心の中でそう呟いて、タクシーの運転手に荷物とギターを渡した。

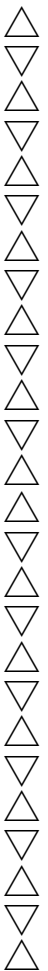
水月がこんな鬼叔母の所に来ることになったはもちろん事情があるってのことだ。

事情もなしに、こんな鬼叔母の所へ好きこのんで来はしない。

のっぴきならない事情。

それも現実離れたおかしな信じがたい事情。

その突然の出来事によって、水月は、ここ、北海道は函館に来ることになった。



中学校の卒業式の一週間前。

体育館で卒業式の全体練習をしていたことだった。

途中から姿を見かけなかった担任が水月の側に来て席を外すように言った。

担任の後をついて廊下に出ると、黒いスーツにサングラスをかけた二人の男が立っていた。

どちらも背が高くがっしりとした体躯だった。

担任はその二人を横目で捉えながら、怯えたような口調で水月に言った。

「叶井君、驚かないで聞いて欲しい。叶井君のお父さんがお仕事中に倒れてしまって、救急車で総合病院に運ばれてしまったらしいんだ。ここにいる方達はお父さんの会社の方で、叶井君を総合病院まで車で送って行って下さるとのことなんだ」

その話を聞いた水月は首を横に傾げた。

それは真っ直ぐに受け止められない話だった。

水月の父は今朝もいつもと変わらず元気だった。大好きな韓国海苔をおかずにご飯を二膳も食べていたし、家を出るときも大きな声で「行ってくるぞ!」と手を振り出て行った。

その父が突然倒れた？

そしてここにいるスパイ映画の中から抜け出てきたような二人が会社の人達？

そんなわけがない。

父さんは公務員だ。

役所で市の環境衛生についての仕事をしている。

この二人が役所の職員だなんてあり得ない。

「ほら、叶井君。急いで、お父さんのところへ」

担任は急かすように水月の腕を引いた。

「ちよっ。ちよっと待って先生。なんか、変だよ、その話。父さんは朝すごく元気だったし、それに、この人達、本当に父さんの職場の人達なの？」

水月は担任の手を振り払って言った。

「叶井君、一刻を争う時なんだよ。なにを言ってるんだ……」

担任の声は震えていた。

そんな担任の様子に水月の疑念は大きくなった。

「水月様」

黒スーツの一人がずっと水月の前に出た。

「我々は大志様の部下でございます。このような風貌ゆえ疑わしく感じられるのもご理解できます。けれど、水月様。今、大志様は本当に危篤なご容態なのです。そして我々は大志様から水月様を急いで連れてまいるようにとの言伝を受け、水月様の下へと馳せて参りました。どうか、我々とご一緒に急いで大志様の下へとお向かい下さい」

一息にそう言うと、黒スーツの男の一人は水月に深々と頭を下げた。

「水月様。どうか、お急ぎ下さいませ」

もう一人の黒スーツの男も頭を下げた。

水月様？ 大志様？ 馳せて参りました？ それに、この二人が父さんの部下？

「今ここで我々の方から事の経緯をご説明することは出来ません。それは後ほどお父様の口からお聞き下さい。とにかく今はお急ぎ下さい。大志様にはあまり時間が残されていません」

「時間があまり残されてないって…。えっ？ それは、どういうことですか？」

「大志様にお会いになればわかります」

「会えばわかるってそう言われても……。納得がいかないっていうか…。やっぱり、なんか…」

水月は視線を床に落とし、靴の底でリノリウムの床を擦った。

突然過ぎる話の上に、強引すぎることの進め方。一方的過ぎる。

まさかとは思うけど…、誘拐犯？

そう考えたらその見た目にも納得がいく。

でも、俺なんかを連れ出してもメリットなんてないはず。

誘拐というリスクと天秤にかけるだけの価値があるとは思えない。それに、そうだとしたら、こうやって学校に尋ねて来たりするわ

けもないか。

人目につく誘拐は、誘拐とは呼べそうにもない。

それじゃ、一体……。

水月はこの突然の出来事の真意を自分なりに推測していた。
きゅっと靴底と床が擦れる音が続いた。

「水月様！」

「はっ…、はい！」

黒スーツの緊張混じりの声に驚き、水月は反射的に返事をしてしまった。

「今は私の話を信じて下さい。ここでこうして立ち止まっていることにこれ以上時間を消費するわけにはいかないのです」

オーラ、覇気。そういった目に見えない人を圧倒する力が黒スーツの言葉と声に含まれていた。

水月はただただ圧倒されていた。

蛇に睨まれた蛙の如く、指先一つ動かすことさえ出来なかった。

「ご理解して頂きますでしょうか、水月様」

水月の額には汗が浮かんでいた。

そのプレッシャーは水月から疑いや推測、そして選択までも放棄させた。

「わ、かり…ました」

言葉を振り絞るように水月は言った。

「ありがとうございます。それでは、急ぎましょう。車は外に停めてあります」

黒スーツの二人は短く頷き、音も無く廊下を足早に歩いて行った。

その遠ざかっていく二人の後ろ姿を見て、水月はふうっと大きく息を吐いた。そして制服の袖で額の汗をこするように拭った。

「叶井君。君が顔を見せれば、きっとお父さんも、うん。…元気になるよ」

担任は水月の肩に軽く手を乗せ、弱々しくそう言った。

水月は何も言わず、廊下の先に行く黒スーツの後を静かに追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2030y/>

鬼退治士

2011年11月12日08時33分発行